

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 神野 愛理 年齢 14 歳 職業・学校名 篠館中学校

震	災	後	は	、	避	難	し	て	き	て	マ	ニ	シ	ユ	ニ	は	り				
部	屋	が	な	く	せ	ま	い	と	こ	ろ	が	と	て	も	不	便	で	す。			
で	も	、	4	年	た	っ	て	マ	ニ	シ	ユ	こ	で	の	生	活	は	、	な		
ゆ	ま	し	た。	で	も	部	屋	の	数	が	多	い	ほう	が	い	い	な				
と	思	い	ま	し	た。	苦	学	し	た	こ	と	は	、	震	災	が	起	き			
た	小	学	5	年	に	は	、	た	と	き	で	す。	3	校	の	学	校	が			
一	緒	に	、	た	時	、	私	は	人	見	知	り	を	す	る	方	だ	、	た		
の	で	学	校	生	活	が	一	番	苦	学	し	ま	し	た。	そ	し	て	、			
中	学	校	に	入	り	、	た	と	き	も	生	活	に	な	め	て	な	く	、	1	
年	の	時	は	、	欠	席	が	多	か	ら	な	い	で	す。							
今	後	は	、	自	ら	の	将	来	の	夢	が	あ	る	の	で	、	目	標			
を	決	め	頑	張	っ	て	い	き	た	い	な	の	思	い	ま	す。					
そ	の	た	め	に	、	今	、	自	ら	が	で	き	る	こ	と	を	や	っ			
て	行	き	、	で	き	な	い	所	は	、	ち	よ	っ	と	お	っ	学	ん	で		
お	し	て	、	姉	ち	ゃ	ん	が	ス	イ	ー	ツ	の	専	門	学	校	に	行		
っ	た	い	な	の	で	た	ま	に	姉	ち	ゃ	ん	に	ま	い	たり	し	て			
た	く	こ	ん	ス	イ	ー	ツ	の	こ	と	を	聞	い	たり	し	て	学	ん			
で	い	き	た	い	な	と	思	い	ま	し	た。	そ	し	て	、	高	校	を			
卒	業	し	た	ら	ス	イ	ー	ツ	の	専	門	学	校	に	入	り	、	そ	こ		
で	も	た	く	こ	ん	学	び	頑	張	っ	て	い	き	た	い	な	で	す。			

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 木幡余凡

年齢 15歳

職業・学校名 飯館中学校

震	災	後	は	避	難	し	な	く	て	は	い	け	な	く	と	も	大				
変	で	し	た	。	学	校	は	川	俣	町	の	中	学	校	の	空	い	て	い		
る	教	室	を	買	り	て	知	強	し	て	い	た	。	バ	ス	で	三	十	分		
以	上	か	け	て	通	学	し	て	い	り	。	そ	の	教	室	を	四	十			
人	以	上	で	使	っ	て	い	た	の	で	せ	ま	か	っ	た	り	と	最	初		
は	と	も	不	便	な	い	と	は	か	り	が	し	た	。	ど	も	先	生			
方	や	地	域	の	皆	さ	ん	な	ど	と	く	さ	ん	の	方	が	私				
に	ち	が	不	便	な	く	学	校	生	活	を	送	れ	る	工	う	に	努	力		
を	し	て	く	た	ま	さ	つ	た	。	先	生	方	、	地	域	の	皆	さ	ん		
支	援	し	て	く	た	ま	さ	つ	た	。	方	が	の	お	か	げ	で	今	は	毎	
日	が	楽	し	く	亮	美	し	、	震	災	後	と	変	わ	ら	な	い	学	校		
生	活	を	送	る	こ	と	が	ま	た	て	い	る	と	思	う	。	な	の	で		
と	も	感	謝	を	し	て	い	る	。												
私	は	今	後	自	分	の	将	来	の	夢	に	向	け	自	分	が	ま	た			
す	こ	と	一	生	懸	命	取	り	組	め	た	い	り	。	そ	し	て	私	に	ち	
の	た	め	に	頑	張	っ	て	く	た	ま	さ	つ	た	。	方	が	の	工	う	に	誰
を	助	け	ら	れ	る	人	、	誰	か	の	た	め	に	頑	張	れ	る	工	う		
な	人	に	な	り	た	い	と	思	う	。	そ	し	て	自	分	の	故	郷	が		
震	災	前	の	工	う	に	美	し	い	村	の	復	興	し	、	自	分	の	故		
郷	を	暮	ら	せ	る	工	う	に	な	り	た	い	。								

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 菅野美紀 年齢 15歳 職業・学校名 学生、飯館中学校

震	災	が	起	き	た	後	、	飯	館	村	は	計	画	的	避	難	区	域	
に	指	定	さ	れ	た	た	た	め	、	全	村	民	が	町	や	市	に	避	難
す	る	こ	と	に	な	り	ま	し	た	。	私	は	当	時	、	小	学	生	だ
っ	た	の	で	川	俣	中	学	校	の	教	室	を	借	り	て	勉	強	し	て
い	ま	し	た	。	そ	の	時	は	、	飯	館	村	か	ら	バ	ス	で	通	う
人	も	い	た	り	、	放	射	能	の	心	配	も	あ	り	、	外	で	遊	ぶ
こ	と	が	で	き	な	い	中	、	み	ん	は	文	句	を	言	わ	が	に	頑
張	る	こ	と	が	で	き	ま	し	た	。	現	在	も	避	難	生	活	で	す
が	不	便	な	こ	と	は	く	暮	ら	お	こ	と	が	で	き	て	い	ま	す
。	今	後	の	私	が	望	ん	で	い	る	こ	と	は	、	震	災	か	ら	も
っ	う	少	し	で	ら	年	経	ち	ま	す	が	、	福	島	県	は	放	射	能
の	影	響	の	せ	い	で	観	光	者	が	少	な	く	な	り	ま	し	た	。
た	か	ら	、	ま	た	震	災	前	の	よ	う	な	福	島	県	を	取	り	戻
す	た	め	に	、	県	を	ア	ピ	ー	ル	し	た	り	し	て	福	島	県	民
が	自	信	を	持	っ	て	出	身	県	を	言	え	る	よ	う	な	社	会	に
な	っ	て	ほ	し	い	と	考	え	て	い	ま	す	。						

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 菅野翔太 年齢 15歳 職業・学校名

飯館中学校

震災前は、飯館村の大自然の中で育てられ
ました。空気も水もきれいで、食べ物も
新鮮でした。そんな中、震災が起こり原子力
発電所の事故により避難生活をするこてにな
ってしまいました。村にいると近所のお家は
あまり近くにはないので、多少さわいたりし
ても気になりませんが、アルバイト生活では話
す声の大きさや足音にも気をくばらなければ
いけないが、たのびながらの時に時間がかりま
した。現在は、今の生活にも慣れて近所の人と
話す機会が増えたと思います。
私は、将来飯館村に帰り村役場をったり村
にのびやかな仕事につきたいと考えています。
また、若い世代が帰ってこめるような村にし
たいと思います。そのため、今自分自身
にできる事を考えなければならぬと思いま
す。できない事にも積極的に取り組み、挑戦
する勇気や何事にも負けない元気を付け、自
分の力を、たのびの人生を誇りに思えるように
したいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 菅野美奈 年齢 15歳 職業・学校名 学生 飯館中学校

わたしは、福島市飯野町にある飯館中
 学、仮設校舎へ毎日スクールのバスで通って
 います。わたしは小学校4年生のときに東日本
 大震災が起きました。原子力発電所の事故によ
 り避難しました。小学校の卒業式に避難先へ建
 てられた仮設校舎へ行きました。また、中学
 校の入学も仮設校舎で行われ、わたしはま
 た飯館中学校へ本校へ行くことがありま
 した。学校生活を送るなかで、本校のたいく
 ち体育館で、いろいろなことを何回もあ
 りました。その中で、いろいろなこと
 がある中で、いろいろなことを経験し
 ました。震災から今までの経験と
 りに感謝しています。そのために、
 いろいろなことに挑戦したいと思
 います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 高橋 虹歩 年齢 15 歳 職業・学校名 飯館中学校

私	は	、	震	災	後	す	ぐ	に	川	俣	町	の	ア	パ	ー	ト	に	引	
っ	越	し	ま	し	た	。	ア	パ	ー	ト	は	と	と	も	狭	く	4	人	で
生	活	す	る	の	に	は	と	と	も	不	便	な	所	で	し	た	。	ま	た
、	飯	館	に	い	た	頃	か	ら	犬	を	飼	っ	て	い	て	、	そ	の	犬
も	大	家	ま	ん	に	無	理	を	言	っ	て	同	じ	ア	パ	ー	ト	に	住
ま	せ	て	も	ら	う	よ	う	に	な	り	ま	し	た	。	今	は	ア	パ	ー
ト	と	も	う	2	部	室	借	り	て	前	よ	り	は	良	い	環	境	で	過
ご	す	こ	と	が	で	き	て	い	ま	す	。	そ	ん	な	環	境	で	私	は
今	美	術	に	関	わ	る	任	事	に	就	く	こ	い	う	目	標	に	向	け
て	日	々	努	力	し	て	い	ま	す	。	そ	の	た	め	に	は	、	勉	強
は	も	ち	ろ	ん	デ	ッ	サ	ン	な	ど	の	実	技	的	な	も	の	に	も
力	を	入	れ	が	ん	ば	っ	て	い	ま	す	。	震	災	が	あ	っ	て	か
ら	福	島	県	は	と	と	も	有	名	に	な	り	ま	し	た	。	で	す	が
それ	は	、	地	震	や	津	波	、	原	発	の	こ	と	な	ど	マイ	ナ		
ス	な	こ	と	ば	か	り	で	し	た	。	な	の	で	こ	れ	か	ら	は	、
福	島	県	の	野	菜	や	果	物	、	自	然	な	ど	の	プ	ラ	ス	な	こ
と	で	有	名	に	な	る	よ	う	に	日	本	だ	け	で	な	く	世	界	に
も	伝	え	ら	れ	る	よ	う	に	な	っ	て	い	け	れ	ば	い	い	な	と
思	い	ま	す	。															

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

学生

氏名 松田亜優

年齢 15 歳

職業・学校名 飯館中学校

私	は	震	災	後	た	く	さ	ん	苦	勞	し	ま	し	た	。	地	震	ど		
家	に	住	め	な	く	た	り	い	と	こ	の	家	に	避	難	し	ま	し	た	。
し	か	し	、	原	子	力	器	電	所	の	事	故	ど	飯	館	村	は	避	難	
指	示	か	だ	さ	ね	山	形	に	避	難	し	ま	し	た	。	1	週	間	以	
上	山	形	ど	飯	館	村	の	様	子	を	確	め	て	飯	館	村	に	戻	る	
こ	と	に	な	り	ま	し	た	。	飯	館	村	は	お	店	も	病	院	も	や	
ど	こ	な	く	、	食	べ	物	や	水	も	半	分	に	な	か	。	た	の	ど	
と	こ	も	不	便	ど	し	た	。	か	ぜ	を	い	い	て	も	病	院	に	行	
け	な	か	。	た	の	ど	た	く	さ	ん	の	人	が	不	便	だ	。	た	と	
思	い	ま	す	。																
◇																				◇
私	は	、	た	く	さ	ん	の	人	が	不	便	な	生	活	を	送	。	こ		
い	こ	と	こ	も	悲	し	か	。	た	ど	す	。	誰	か	の	役	に	立	ち	
た	い	と	思	う	よ	う	に	な	り	、	私	は	看	護	師	を	目	指	す	
こ	と	に	し	ま	し	た	。													
飯	館	村	に	住	む	人	達	は	も	ち	ろ	う	、	近	く	ど	困	。		
又	い	ろ	人	が	い	れ	ば	助	け	て	あ	げ	た	い	と	思	い	ま	す	。
ま	た	、	避	難	し	て	今	の	所	が	便	利	な	生	活	だ	と	思	い	
ま	す	。	若	い	人	が	飯	館	村	に	戻	ら	な	け	れ	ば	前	み	に	
い	飯	館	か	お	暮	ら	し	は	ど	き	た	い	と	思	う	の	ど	若	い	
人	が	帰	り	た	い	と	思	う	飯	館	村	に	し	て	ほ	し	い	ど	す	。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 高橋 奈央

年齢 15歳

職業・学校名 学生 飯館中学校

3	月	11	日	の	震	災	が	あ	り	そ	の	後	に	原	子	爆	発	電		
所	の	水	素	爆	発	が	あ	り	私	の	住	ん	で	い	た	飯	館	村	は	
避	難	を	よ	ぎ	に	く	ま	し	た	。	そ	れ	か	い	は	、	仮			
設	校	舎	の	学	校	ま	で	バ	ス	に	的	(時	間	乗	り	通	学	し	
て	い	ま	す	。	朝	も	早	く	起	き	な	り	ね	が	い	は	な	か	。	
た	り	し	て	毎	日	大	変	が	す	。	飯	館	村	へ	い	た	時	な	ら	
ば	こ	ん	に	朝	早	く	起	き	る	必	要	も	い	は	な	か	。	た	の	で
は	い	い	か	と	思	い	ま	す	。	バ	ス	で	通	学	で	ま	る	の	は	
い	い	け	い	大	変	な	の	で	色	々	な	事	を	思	い	ま	す	。		
今	後	の	自	分	の	目	標	は	自	分	の	入	学	し	た	い	高			
校	へ	行	け	る	よ	う	に	勉	強	を	頑	張	り	、	自	分	の	将	来	
の	夢	を	叶	え	た	い	と	思	っ	て	い	ま	す	。	そ	し	て	、	い	
っ	か	は	自	分	の	不	子	さ	と	入	居	り	、	不	子	さ	と	の	復	
興	に	協	か	し	た	い	と	思	っ	て	い	ま	す	。	な	の	で	、	私	
は	そ	の	た	め	に	早	く	不	子	さ	と	入	居	れ	る	環	境	に	し	
て	い	た	だ	ま	、	公	共	機	関	ま	今	ま	で	通	り	な	よ	う	に	
し	て	も	い	た	い	と	思	っ	て	い	ま	す	。							

「東日本大震災の体験談と復興への想い」麻葉田紙

匿名希望

東日本大震災があった、た五年前、ぼくは5
 さいでした。でも、とてもこわかったのをお
 ぼえています。三月十一日の夜はよしんがず
 くと続いていてぼくたちは、おばあちゃん人の
 妹の家のビニールハウスの中で朝になるのを
 まちました。ハウスの中に、こたつとストー
 ブも持ってきてみんなでいました。
 朝になってテレビで、福島第一原子力発電所
 がばく発したのを見ました。
 そのあと、ぼくは船員、こおり山、さのと
 ひな人しました。
 二年前、ぼくは自分の家がある都路にもど
 ってきました。ぼくは今家族みんなと幸せに
 くらしています。でも、あの時のしん災で大
 切なお家や大切な家族をなくした人がたくさん
 います。その人たちの心のきずが早く治れば
 いいなと思います。
 みんなが、安心して笑顔ですごせる明るい
 福島に、なるといいなとぼくは思います。

匿名希望

3月11日、ぼくが厚いスエードでおむろる春の時
におきたことでした。

おむろるねをしていたらさわがしかつたので
おきたら時計がぼくの体にこつこときました。
た。3つに

ふと人をかぶつて外にでてひな人しました。
そして体育館にいどうしました。

かんせんやまくなどがこわれていました。
3時のおやつは体育館でたべました。

そしておいにお母さんにかかえにきてもら
いました。

すかた都路にきました。

都路はほうしゃせんかたくせんあるという
ので三春のおばさんの家にいきました。

おばさんにときわのアパートをすすぬられ
たのでいとこわりのアパートにはあちゃんたちが
すまことになりました。

次は船引のたんち、次はかせついうたくに
はあちゃんたちがつこしました。

そして今では都路での楽しく生活しています。

「吉岡十十郎」の体験談と徳田人の相い 藤田 純

匿名希望

2011年3月11日、わたしは児童館で友
 だちとい、しょに遊んだり、笑ったりしてい
 ました。でもとっぜん大きなじしんがおきて
 遊んでいた友だちとい、しょに、テーブルの
 下にもぐりました。なかなかゆれがおさまら
 ず、先生とい、しょに外に出て、みんなでお
 かえが来るまで集まって、こいしました。そ
 の日の夜家で家族とい、しょにぬました。
 次の日家族とい、しょにぐんま県のいとこ
 の家に行きました。長い間とまらせてもらい
 ました。

船引にもどり、2014年には、入学する
 予定だったお道小学校に来ることができまし
 た。

わたしが小学6年生にやるころは、岩井沢
 小と同じですが、わたしは、道路かも、と東
 日本大震災前の道路になればいいなと思っ
 ています。

匿名希望

わたしは、しんじいのとき、5さいのよう
ちえんせいでした。いきなり、大きなゆりか
ぎで、わたしは、じしんだ、あぶないと思い
園内をうろちょろしていました。じしんがお
きたとき、先生方は、大きな声で、
「つくえの下にかくおアください。」
とたくさん言っていました。わたしは、ちか
くにあった、大きなつくえにかくおりました。
とまっアは、またくるじしんでした。
フギの先生のしじは、
「そとに下ます、友だちをおしたりしないよ
うに。」
でした。そして園庭のまん中にたくさんのお
いたちかむらふにくるまっアしていました。先生
方は、また歩けないう子などを、おんぶしてい
ました。わたしは、ほかの子かむかえにきて
よろこんでいるのを見て、いいなと思いまし
た。お母さんかやっときてわたしはよろこん
で、車にのりこみました。今でも、あの時
のことを、おぼえることはできません。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

東日本大震災の時わたしは五さいでした。
 都路子ども園のいじょうかんどう月11日遊んで
 いました。その日は、ちょうと妹のたん生日
 でした。いじょうかんどう遊んでいると、とつせ
 ん大きないしんがおきました。わたしは、こ
 わくてたまりませんでした。泣いている姿を
 みました。みんなはいしんにおおなからお
 母さんやお父さんのおむかえを待ちました。
 わたしは、おむかえかきたときほ、とれて泣
 いてしまいました。すぐに都路の家に戻りま
 した。家にもど、と、すぐに自分のものをと
 っ、と、お母さんのい、かの春山にひなにしま
 した。
 わたしの復興への想いは、東日本大震災を
 うけて、かなしい気持ちにな、たぶん多かた
 たので、わたしはみんなが東日本大震災をわ
 すれられるくらい楽しい所にしたいです。
 東日本大震災は決しておれ単にわすれられる
 事はなないけれど、みんなが楽しく、元気に
 な、てくれるようにしたいです。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験記と復興への想い」応募用紙

匿名希望

ぼくは、二のときには家にいてゲームをやって
 ました。もし人がきたときは、そとにでま
 ました。ぼくは、いし人がおおきかっただ
 す。だから家の中がこわれたしだいのな物も
 なくなっ、てしまいました。いし人がおお
 たらふねみきにいきました。またな人な
 たものを買ひにいきました。いし
 ぐもたになくな、たいもいるから、ちよっと
 いし人もいけです。いし
 みやここの家がこあれてるから、あたらしい
 家をたてました。いし
 けれどまだこあれていゝ家に住んでいゝ人そ
 います。いし
 こあれていゝない家もあるかと思、たら、か
 んとかがわれていました。いし
 思は、いし人がよめま、こゝるや、おお
 きないし人がまた時すぐにげれるようにいゝ
 人であゝできるようにしたいです。いし

匿名希望

平成23年3月11日はぼくはようち園年中
でした。だからあまりその当時のごとを覚えて
いません。その日はたしかようち園が終わり、
児童館の中で遊んでいました。おやつの前に
地しんがあり、建物が大きくなり、カーの
上の荷物が落ちました。そして、園庭に
ブルーシートを広げて、そこにひな人しまし
た。その後、どのくらい待ったかは分からな
いけどおばあちゃんさんがむかえにきてくれました
た。家に帰って中を見とみると、どろぼうに
あられたみたいになっちゃった。こい
ました。その日の夜はとなりのおばあちゃん
の家でねました。朝起きるとお母さんが夜何
度も地しんがおきておくれなかつた
と言っていました。ぼくは、全然気がつかず
にねおりました。すると、お母さんにお
前はのん気がいいなと言われました。これい
思い出ではなく、せまいおばあちゃんの家で
みんなでぎゅうぎゅうになつたおたおかしな
思い出です。

氏名 本間 蓮玖斗 年齢 11 歳 職業・学校名

古道小

ぼくたちが、ちょうど周生のときにじしんが
おきた。みんなが校庭の真中であつた。
そのときは、これくて泣いてしまった人もい
た。

それから石森小学校で1年生になった。
それから2年生、3年生をすこした。
4年生になつて都路にもどつてきた。そのと
きは、とてもうれしかった。それで、5年生
になり楽しいことがいっぱいありました。
ぼくは、都路にもどつてきてよかったです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 門馬聖葉

年齢 11 歳

職業

学校名 古道小学校

わたしがようち園のころあの東日本大しん
 災がおこった。その時は児童館の長つくえん
 づくらいに全員で入った。その後少しずつ地
 しんがおさまってきたので先生が「みんな外に
 出るよ」といったのでみんなで外にひなんした
 のだ。4〜5枚の茶色のモウフにれくなりお
 んなで入っていました。そしたら雪がちらっ
 いてきてとても寒かったです。みんなの家の
 人が向かえに来ていてわたしの大親友がかえ
 ってきてとても心ほそくなっていた。やっ
 とわたしの家の人がかえに来てくれた。リ
 ヅクをせおいじいちゃんにのった。その
 後大ごえの親せきの家に1ヵ月ひなんしてい
 ました。
 今は都路にもどって来れた。しかもど〜も
 というお店も出来て前より少し住みやすくな
 ったと思います。その何か月かあとにファミ
 リーも出来ました。このことを通していろんな
 かたがたの備かがありとてもすてきな都路が
 あるのだと改めて気づきました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉田 実里

年齢 11 歳

職業・学校名 古道小学校

私は震災当時幼稚園年長でした。そのころ
 は、ただ地震があ、ただけかなあ、すぐおさ
 まると思、ていました。しかし、その次の日、
 福島原子力発電所でばくはつが起こり、私
 達は都路からはなれ、ひなんをしなくてはな
 るなくな、てしまいました。思、てもいない
 ことが起きたので、とてもおとろき、とても
 いやな気持ちになりました。
 ひなんした後も、仮校舎で勉強をし、震災
 から4年目の年にふるさと都路にもど、てき
 ました。そして、震災から5年た、た今、私
 達は今でできることをし、かりがんば、ていま
 す。ふるさとのみんなで自分ができるところを
 がんば、ています。震災はつらいことがたく
 さんありました。でも、震災はつらいことが
 あ、たがらこそみんなが協力してがんばれば
 みんな明るくなるということを教えてくれま
 した。これからも震災であ、たこと、震災を
 わすれずに生活していきたいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 菅野彩華 年齢 11歳 職業・学校名 古首小学校

幼稚園のそう組だった私は、大きな地震におとろきなから友達と一緒に園庭に逃げ出しました。向かえに来たお母さんと家に帰ると、部屋の中は物が散乱していて、なぜか塩の容器が落ちて一面に散らばっていたことを記憶している。家族で父の車で須賀川の祖母の家に向かったが、須賀川の方か地震のゆれが強くて途中から常葉の祖父の家に行き泊ることになった。船引に仮設住宅ができて、そこに移り今も住んでいる。

小学校に入学して、もう五年生になった。今も、私達の周りでは風評や除染の袋が山積みになり、通学の往來に気持ちが悪くなる。まう。

震災と原子力事故から学んだことは、周りの人達と仲良く助け合わなくてはならないことと自分の力で少しでも地域のために貢献することだと思ふ。みんなが楽しく暮らせる町であるために、私も一生懸命勉強して地域が良くなるために参加したいと思っている。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 古河 愛琴 年齢 11歳 職業・学校名 古道小学校

私は東日本大震災の3月11日、地震があ
 った時まだ幼稚園でした。周りの友達か泣
 いていて、私もとても不安でこれが、た事は
 覚えています。そしてそれからパパがむかえ
 に来て家の中はいろいろな物がたおれて歩け
 ませんでした。次の日急にひなんするとママ
 が言ってお家じゃなくアパートにひ、しま
 した。アパートでの生活は楽しか、たけど、
 都路のお家みたいに外で遊べないし、少しで
 もうるさしするとすぐおこられました。
 ◇
 あれから4年かたち久しぶりに都路に帰、て
 きてからの生活はなんだか安心した気持ちと
 な、かしい気持ちがひ、ぱいでした。学校も
 古道小学校になり、私は始めて校舎に人リテ
 れしか、たです。地域のみなさんも帰、てき
 たのを喜こんでくれて少しはずかしか、たで
 す。私は都路が好きです。地域のみなさんも
 やさしいし、一番は自分のお家でみんなとい
 っしょに生活できる事が一番うれしいです。
 このしんさいのけいけんは絶対に忘れません。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉田 陽平 年齢 11歳 職業・学校名 古道小学校

ぼくたちは、しん災があつた年ちようど卒
 園式でした。卒園式の荷印が前ちようど女
 災がおまリぼくたちは、卒園式はで
 ませんでした。ですが、石森小で入学式
 をできたので良かったです。その3年
 後には古道小にもどれ、たくさん
 の人がぼくたちをおかえてくれた
 のでとてもうれしかったです。た
 くさんの友達とも再会でき、たの
 しい学校生活ができていますので
 とてもうれしいです。

匿名希望

平成23年3月11日東日本大震災の日、私はまだ幼稚園の年長でもうすぐ小学校1年生になろうとしていた。けれど、3月11日に大きなじしんが私達をおそってきた。そのじしんは今までにないとても大きなじしんでした。私達は、外にでて、もうふにくるまていました。とてもこわかったです。

そして、ひなんをしました。ひなんをする時は夜だ。たので、足もともあまり見えずにひなんしました。ひなん先の学校は旧石森小学校です。そこで幼稚園の卒業式と入学式をやりました。石森小学校では3年間お世話になりました。4年生からまた都路にもどれることになったのでとてもうれしかったです。

私は、東日本大震災を体験してから、5年生になった。今でも、じしんがくるとふあんになります。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 宗像 愛望 年齢 11 歳 職業・学校名 古道小学校

私達の学年は、本がかりとした卒園式が
ありませんでした。覚えた歌も歌わずに小学生
になりました。

ですが、古道では、田村市復興応援隊のよ
お様が復興を進めるためにいろいろを企画を
たててくれて、11月、その中でも私達も参加
している。ふるさとじゅくが、とても楽しい
し、勉強になるせじもあり、いいさかくだと
思えます。ふるさとじゅくに勉強したり、季
節に合った物をつくったり、郷土料理を作
ったり、友達と話したりできるとてもよい時間
だとも思います。

自分の学校が地元にもいいたとして、他
にはまだ、地元にもおられていたい人がいるの
で、いろいろな、お金などに協力して、復興
に関わりたいです。そして、ふるさとじゅく
がまたあれば、参加して、地元のこともも
と知って、くらしたいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉岡 千夏

年齢 11 歳

職業・学校名 古道小学校

私、古道小学校児童が、都路で学習をして、
 二年目に入りました。去年までは新せんに感
 いてしま、ていた都路の風景も、ようやく人
 前のように見慣れてきました。しかし、一
 つだけ今年にな、て変わ。たことがあります。
 それは、地いきの見え方です。
 五年生は、今年の総合学習で、多くの地いき
 の人達にお世話になりました。12月17日の木
 曜日には、感謝の会も開きました。
 去年までは、1年を通して地いきの人達と
 の関わりがあまりありませんでした。今年の
 地いきの人達との関わりは、主張作文などに
 もまよめ定した。
 このようなことにより、地いきの人達と関
 わること、今までは「うが」、た都路の見方
 になりました。これからは、ふるさとを大
 切にしていきたいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 新橋公太

年齢 11 歳

職業・学校名 専小 小学校

ぼくは、震災後にひいおばあちゃんをなく
 しました。ぼくの、ひいおばあちゃんは、田
 人ぼも、野菜作りも大好きでとても上手でし
 た。しかし、この震災で田人ぼも、畑も出来
 なくなり、おばあちゃんはとてもが、かりし
 元気がありませんでした。そんな、おばあち
 さんの姿を見て、仮設で一緒にボランティアで
 野菜を作ることにしました。おばあちゃんは
 喜んで元気になりました。それから、ぼくと
 おばあちゃんは、野菜の手入れや水やりをし
 たから、たくさんのお話しをし、ぼくも元気に
 なりました。二人で作った野菜を家族みんなに
 食べさせるとみんな「おいしい」と言われ、と
 てもうれしか、たです。一緒に作った野菜で
 おばあちゃんは元気になり、家族みんなが笑
 顔になったことに加え、たによりぼくは、うれし
 か、たです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 平井 深奈

年齢 11 歳

職業・学校名 古道小学校

わたしはまだようち園でちょうど帰。てぎ
 でおやつを食べていたときに強いゆれがきて
 びくりにしてあわてて外に出ました。そのと
 きは友だちも心配だ。たし、これからがすこ
 く心配でした。

今はもうみんな指示が解じよされた田村市
 都路町でくらしています。また、いろいろな
 ところではせんがされていはいき物がた
 くさんでているけれどそのはいき物の置き場
 所がちゃんとあるのかか分からないし、もし
 置き場所が無くなたらどうするのかを考
 えているのかなとわたしは思います。なのでそ
 このところをちゃんと考えるとわたしはいい
 と思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 村上翔悟

年齢 10歳

職業・学校名

古道小学校

東日本大しん災が起、た時、いろいろな県
 が、しん災の被害が大きか、た地方に、食べ
 物や、いろいろな物を送、てくれたりして
 くれました。だから、福島県も、ほかの県で、
 災害がおきた時も、何か、食べ物などを、送
 たりすると、東日本大しん災の時に、食べ
 物を送、てくれて、福島県の復興はな、たか
 ら、ほかの県の復興にもつながると思、うか
 ります。そして、東日本大しん災がおこ、て、
 4年後、都路にもど、てきても、学校では、
 いろいろな物が、ほかの県がくれたりもして
 います。

だから、ほかの県でも、さい害があ、た時
 も、物を送、ておけると、復興にもつなが
 るか、ります。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 宗像良人 年齢 10歳 職業・学校名 占道小学校

今から、約5年前東日本大じん災が起こり
 ました。ぼくは、その時6才でとうち園生で
 した。まだ、6才だったのて、大じん災が記
 きた時、すごくこわくなりました。そして、
 おばあちゃんやお母さんからはげまされなが
 ら、家から出ました。小ぶりの
 じいばらくすると、地じんがおさまりました。
 家の中は、ぐちゃぐちゃでした。いろいろ
 な物が落ちたりしてました。この後のこと
 は、ほとんど覚えていません。地じんが、お
 さまって、安心したからなのかもしれせん。
 この時は、知りませんでした。このじん
 災により、原子力発電所事故が起こり、放射
 能にまらおせんされました。このせいで、常
 葉は移住することになりました。で今は
 住める状況まうにな、てきました。
 ぼくは、こんな悲げきは、二度と見たくあ
 りせん。原子力発電などあぶない発電でけ
 なく、安全で環境にやさしい発電をするでき
 たとぼくは、思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 今泉 結奈

年齢 12歳

職業・学校名 古道小学校

東日本大震災があつた五年前、私は小学一年生でした。地震があつた時間私は、体育館で友達とおにごつこをしていました。走つていたのでゆれてゐるのが、分かりませんでした。めだかの学校の先生に「外にでてください。」といわれたので外にでました。そして、学校や体育館の窓がゆれていました。のぼり棒がくずれていました。泣いてゐる友達がたくさんいて、私もだんだんこわくなつてきて泣いていました。その日は、雪がパラパラとふつていました。地震が少しおさまつた時みんながバスにみんなしました。お母さんがむかえに来た時はすごくうれしかつたです。家にかえると、家の中がいろいろな物がおちていてびっくりしました。

その後の三年間の、みんな生活は大変でした。その中で、一番よかつたことは家族みんなでいれたことです。もう、あの時のようなこわい思いは二度としたくありません。この先安心して暮らしていただけることを願つています。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 遠藤 優人 年齢 12歳 職業・学校名 田村市立古道小学校

平成23年3月11日午後2時46分、この時の出来事は、ほくも予想できない出来事でした。ほくは、そのとき、授業が終わって帰りのあいさつをして、めだかの学校にいらてカバンを置いて体育館に行く途中、地震が起きました。その地震は、とんとん大きくなってほくも身動きが取れないほどでした。ほくは、大いそぎで外へ避難しました。校庭には、先生や友達が集まって、すわりこんでいました。そして、先生の指示をよく聞き、下校しました。家に帰ると、家具や食器がそこらじゅうに落ちてありました。テレビを見てみると、地震のえいきょうで津波の被害が大どころで地割れが起きたところがあり、何人も人が亡くなっていたというニュースが流れられました。ほくは、とても不安でした。でも、そのときのほくは、またあのときの平和な都路で暮らしたい。また、学校で元気に勉強したいと、心の中からそう思っていました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 加藤翔馬

年齢 12歳

職業・学校名 古道小学校

2011年3月11日午後2時47分に、
 東日本大震災が起き、4年10ヶ月がたしま
 した。
 ぼくは、まだ1年生で×ダカ学校に行き体
 育館で遊んでいたらその時、じつともなリ地震
 が起きました。みんなは、校舎の前に避難し
 ました。大きな地震がおさまったところ下の駐
 車場にバスがあつたその中に荷物かえがくるま
 でまつていました。
 家に帰ってきたからもう地震が起きたり起き
 なかたりくりかえしてました。夜は、地震が
 起きたりして、いって村のみんながたじろ。
 次の日の夜には避難勧告があつて三春の家へ
 行きました。1ヵ月ぐらいは船引に避難し
 ました。都路の家へ行ってみると鼠のついで
 らけた。4年後には都路へまた戻りました
 ね。やはり産まれ育つたふるさとはいいな
 思いました。新鮮な空気を吸えたりさかいに
 自然をみられたし友達と遊べたりできるので良
 かつてあつた。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 加藤 綾太 年齢 13 歳 職業・学校名 古道小 学校

私	は	、	震	災	の	と	き	一	年	生	で	し	た	。	進	級	ま	で		
残	り	一	カ	月	だ	っ	た	の	ズ	ワ	ワ	ワ	ワ	し	て	い	ま	し	た	
加	、	地	震	で	終	業	式	は	行	わ	れ	ず	、	自	分	が	二	年	生	
に	な	、	た	実	感	か	わ	い	て	き	ま	せ	ん	で	し	た	。			
地	震	の	と	き	私	は	下	校	途	中	で	し	た	。	自	宅	の	庭		
ま	で	つ	く	と	急	に	激	し	い	揺	れ	に	お	そ	わ	れ	、	そ	の	
場	に	う	ず	く	ま	っ	て	し	ま	い	ま	し	た	。	こ	わ	く	て	、	
お	そ	ろ	し	く	て	、	体	験	し	た	こ	と	も	な	い	よ	う	な	震	
動	が	私	の	体	を	左	右	に	動	か	し	、	は	や	く	収	ま	れ	!	
と	と	か	考	え	ら	れ	ま	せ	ん	で	し	た	。							
◇																				
す	る	と	、	私	は	先	生	に	言	わ	れ	た	あ	る	言	葉	を	思	い	
出	し	ま	し	た	。	「	地	震	が	お	き	た	ら	広	い	場	所	に	ひ	な
ん	し	て	、	」	そ	の	言	葉	を	守	っ	た	お	か	げ	で	、	傷	を	負
わ	な	か	、	た	の	か	も	し	れ	ま	せ	ん	。							
皆	さ	ん	に	伝	え	た	い	こ	と	は	、	命	が	一	番	と	し	う	こ	
と	で	す	、	火	事	、	地	震	、	交	通	安	全	教	育	な	ど	、	訓	
練	は	た	く	さ	ん	あ	り	ま	す	か	、	一	つ	一	つ	き	ち	ん	と	
取	り	組	む	こ	と	か	、	命	を	守	る	こ	と	に	つ	な	か	る	の	
か	も	し	れ	ま	せ	ん	。	地	震	は	思	わ	ぬ	と	き	に	発	生	し	
ま	す	。	皆	さ	ん	、	気	を	つ	け	ま	し	よ	う	!					

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 菅野翔

年齢 11 歳

職業

学校名 古道小学校

ぼくは、東日本大震災の体験は、学校で最
 初にあつたのが地震でとても地面が学校がゆ
 れたりしてがけもくずれで砂なでがくずれた
 りしました。バスで家に帰ると地震はあな
 まりおさまりぬいさし家は外から見ると家
 がまたゆれていました。
 今は地震ががけがくずれることはなくなり
 きで地震がおきたりしてそんなに大きい地
 震ではなからよか、たです。
 今後進んで未来は、東日本大震災などがな
 いところに進むといいと思いました。
 東日本大震災などがなければ都路にすんでい
 た人ももどってくることもできると地域の人
 もいいかなと思いました。都路が復興すれば
 お店も地域の人を増えるこの町にらしくして
 くらせると思いました。
 今のこの町は、また帰るとまたわいらい人も
 いるので地震がおきなければ今のこの町に帰
 ってこれるともできる人ではないかと思
 いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 坂本 虎雄 年齢 12 歳 職業・学校名 古道小学校

ほくは、しん災の時には1年生で教室でい
 えがくらの友待きしていました。その時にい
 きふり地しんが来ました。その時僕は、なん
 だ地しんかと思いましたが、まさかあんなに
 こになるな人で思いもしませんでした。でも
 ゆ木がたんだん大きくなっていき少し不安に
 なりました。しんじくして校庭にちびんしん
 さいとゆうそうがあつたので校庭に行こうと
 すると外の地面があささこさし地割木が起き
 ていました。その時僕はおどろきました。校
 庭に行くて何人が泣いてゐる人を見ましたか
 上級生が下級生をなぐさめてゐる姿に僕は心
 うたえました。そ木がさしてほくは現は船
 引に付人でいます。遠くへ行つてしまつた
 遠もいるけ木で、ここにきておいい友たすか
 できでよかつたです
 こ木がうはあんなにげまかおまないうか
 夢、希望にみよあふた来来になつたはしん
 とほくは思います。そう存さぬうに僕はか
 けりたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 富樫優心 年齢 12歳 職業・学校名 富樫優心

ぼくが、震災にあったのは、小学校一年生
の時でした。とてもすごい揺れで、こわい思
いをしました。原発事故により、家族とバラ
バラに避難をしたので、とても心細い不安な
日を過ごしました。
産まれ育った、自然あふれる都路には、も
う帰ることは、できないうのかなと思い、とて
も悲しい気持ちになりました。
しかし、二年前に、いろいろな人のおかげ
で都路に帰ることができました。
◇
ぼくは、スポーツ少年団のソフトに入り仲
間と元気いっばいソフトを楽しめることができ
ました。
震災では、多くの人達が亡くなりました。
ぼくたちには、命があるので、これからは、
ぼくたちが助けられた分、困った人が
い下り、助けられる、立派な大人にびりた
と思えます。
◇

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 松本 亜海

年齢 12歳

職業

学校名 古道小学校

とつびん地しんがなっ て、ひ。くりした新
 は、一早く外へにけました。私は、体育館の
 入口付近にいたので、とてもにげやすか。た
 のを覚えています。でも、もし私が体育館の
 入口付近にいなか。たりどうな。ていたでし
 よう。こわくて一歩も早がでなか。たにちか
 ありません。そのことは、とても不幸中の
 幸いたなと感じていました。先生方が保護者
 に電話してむかえに来てもらうことにしまし
 た。私は、とても安心しました。でも、じい
 じとお母さんは仕事、ばあばあ家の事として
 もいそがしか。たのでなかなかむかえに来て
 くれませんでした。でも、家が近いまゐろく
 えのお父さんが一緒にむかえに来てくれまし
 た。とても安心しました。家に帰ると、テレビ
 画面が全部ぐちゃぐちゃにな。ていま
 した。私はとても不安でした。でも何時間か
 するとじいじとお母さんが帰。てきました。
 その時には、安心しました。とてもこわか。
 たけど一生忘れな思。い出です。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 古河 醒大 年齢 12歳 職業・学校名 古道小学校

ぼくは、東日本大震災の体験をして本当に
 こわかったです。ぼくは、大震災が起きてか
 りマンションが学校は、リフかり始まるのか
 友達にいつ交えるのかときどきしなかりいま
 した。そして石森小学校に行き嵐井沢小学校
 とりしよに勉強をしました。こわかりは、も
 うこのようかことかまきか「よう」にしたいで
 す。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 柴 優 七海 年齢 12 歳 職業・学校名

古道小学校

これはわたしが1年生の3月11日のこと
 奇。わたしは放課後体育館で遊んでいました。
 すると小さなゆれが少し感じました。気のせ
 いかと思いましたがそのゆれがぐらぐらと
 大きくゆれたのです。大きなゆれが起きたと
 みんながすぐ体育館のドアから逃げ出しまし
 た。わたしはそれが地震だということが分か
 らなかつたのです。先生が「地震です。早
 く逃げてください。」と言ったのでようやく地震と気
 付き急いでみんなのいる校庭の前の方へ走り
 ました。わたしはみんなが泣いてい子のを見
 るのがまんじました。わたしも泣いてしまいま
 した。やうとお母さんが来て安心しましたが
 2年生になつて石森小学校に岩井沢小学校の
 子たちと3年間いました。その3年間の中で
 はやく古道にもどりたいなと思いいつになりに古
 道小学校が大好きなんだなと感じました。5
 年生のときに大好きな古道小学校へもどるこ
 とができました。この震災の経験があったか
 らこそ古道小学校の大切さを知りました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 村越 臨葉 年齢 12 歳 職業・学校名 古道小学校

私が東日本大震災を体験したのは小学1年
 の時でした。私はとつぜん大きな地震が起き
 たのでとてもおそろしくて、泣いていました。
 すると、放送があり外に出ると友達も泣きま
 がら外に並んでいました。その後、おばあち
 ゃんがむかえに乗てくれました。私は家族に
 合えて安心しました。しかし何日がたつと、
 原発がばく発にひ難しなければならなくな
 ってしまうと。ひ難先の旧右森小学校では
 岩井沢小学校という学校と合同で学習しまし
 ためして、昨年都路にある本校に帰ってしま
 した。しかし、帰って来た児童の人数は震災
 前よりもかなり減ってしまいました。また、
 ひ難先に家を造り、たり引越してしまったり
 と、都路に住む人の人口も減ってしましまし
 た。そんな中来年私は中学生になります。そ
 の中でも中学校が別々になってしまう友達が
 います。その友達の話も忘れず、都路を元氣
 にしていきたいと思えます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉田伊吹 年齢 12歳 職業・学校名 田舎市立古道小学校

平	成	23	年	の	3	月	11	日	に	東	日	本	大	震	災	が	起				
こ	の	時	に	福	島	県	に	大	規	模	な	災	害	も	あ	た	ら	し			
た																					
こ	の	時	に	ほ	く	は	1	年	生	で	し	た	。 学	校	か	ら	出				
た	す	ぐ	の	坂	で	と	て	も	大	き	な	ゆ	れ	が	あ	り	。 上				
り	ま	た	ら	何	が	起	こ	た	と	思	い	ま	し	た	。 今	ま	ま				
で	こ	ん	な	け	り	け	ん	が	な	ら	た	の	で	ど	う	し	て	ま			
い	の	か	ら	金	く	分	か	ら	な	ら	な	り	。 今	ま	ま	こ	と	に			
な	ら	な	と	思	い	ま	し	た													
五	年	生	で	福	島	議	定	書	も	習	い	ま	し	た	。 今	ま	ま				
時	に	二	酸	化	炭	素	の	こ	と	も	な	ら	な	り	災	害	な	ら			
は	地	球	温	暖	化	が	原	因	に	な	ら	な	り	。 今	ま	ま					
こ	と	か	ら	分	か	り	こ	れ	の	進	行	も	す	す	め	て	い	る	の	か	
二	酸	化	炭	素	で	す	。 今	ま	ま												
今	ま	ま	の	で	今	後	進	め	。 今	ま	ま	未	来	の	ほ	く	の	考	え	は	
二	酸	化	炭	素	を	減	ら	せ	る	取	り	く	み	も	し	て	こ	れ	が		
今	ま	ま	の	地	球	の	災	害	を	減	ら	せ	る	取	り	く	み	も	し	て	
今	ま	ま	と	思	い	ま	す	。 今	ま	ま	二	酸	化	炭	素	を	出	さ			
今	ま	ま	の	取	り	組	み	や	節	電	。 節	水	を	し	ら	へ	り				
し	て	い	け	た	ら	な	ら	な	ら	な	ら	な	ら	な	ら	な	ら	な	ら	な	

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉田 美桜 年齢 12 歳 職業・学校名 古道小学校

復興とは何なのか。辞書によると「元の状態にすること」とあった。私は復興のゴールについて考えてみることにした。

震災による原発事故により、私の町の様子は変わってしまった。お店や会社が無くなったり、引越す人もたくさんいた。元の状態にすることが復興だとすれば、それが達成させるのは難しいだろう。

しかし、町には新しいお店ができたたり、震災前には無かったイベントが行われたりもしている。もしかすると、復興とは元の状態にすることだけではないのかもしれない。私たちの新しい町作りにそれが復興のスタートなのではないだろうか。

より良い町作りにはゴールが無いように、復興にもゴールは無いのかもしれない。それで私の町は見えないゴールに向かい、一歩一歩前へ進んでいる。私もボランティアをしたりイベントに参加して、新しい町作りに協力していきたいと思う。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 渡辺海叶

年齢 12 歳

職業・学校名 古道小学校

東日本大震災、ぼくはそのとき、まだ一年
 生でとつぜんの地震だ。たのでび、くりしま
 した。都路から船引、船引から郡山、郡山か
 ら新潟、新潟から郡山にもど、て、栃木とい
 うふうに、何回もひなんをくりかえしました。
 ひなんしているときに、お父さんとお母さん
 のことが気にな、て悲しくなることありま
 した。だけど、悲しくても、毎日をがんば、
 て過ぎしました。そして、新しく三春にひな
 んしました。三春にひなんして二年生になり
 石森小学校にかようことになりました。岩井
 沢の友達もいて少し安心しました。石森小学
 校では友達と楽しく遊ぶこともできてうれし
 か、たです。五年生にな、てや、と都路に帰
 ることができました。ひさしぶりに古道小学
 校の校舎の中に人、たしゅんかんた古道小の
 においがしました。そして、いまでも友達と
 楽しく遊んで、楽しく学習しています。
 これからも、大震災がおきず、みんなで楽
 しくしていけるようにしたいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 安藤 利空 年齢 9 歳 職業・学校名 石神第一小学校

2011年は、ようちん生¹でした。ぼくは、地²しんか³すた時は、すごくにおか⁴ったです。ぼくは、家族で二本松⁵にひなんしていました。二本松には、友⁶たちがい⁷なかつたのです。二本松で、友⁸たちにな⁹った人は、みんなやさしいです。

二本松には、三年間¹⁰いました。二年間¹¹の間は、お父¹²さんが、家¹³にもと¹⁴って仕事¹⁵をしていてい¹⁶なかつたので、さみ¹⁷しが、た¹⁸です。二本松¹⁹から原町²⁰が帰²¹ってきたらしん²²さり前²³とは、ちが²⁴って町²⁵がわ²⁶らっていてとむもび²⁷く²⁸りました。

原町²⁹がよくなるには、店³⁰やスパー³¹マーケッ³²トをつくり、店³³をひらきなおし、じ³⁴よせんぎ³⁵ぎ³⁶ょうが³⁷おわると、この町³⁸がすごくよい町³⁹になると思います。もう一つは、ぼくがあそび⁴⁰に行⁴¹っていた、公園⁴²のアスレ⁴³チック⁴⁴のよな木⁴⁵でできた物ができると、いいな⁴⁶あと思⁴⁷いました。原町⁴⁸がいろ⁴⁹いろな⁵⁰くふう⁵¹をしていろ⁵²ろ早く⁵³い⁵⁴っ⁵⁵てほ⁵⁶しいです。

(20文字 × 20行)

氏名 目黒 とみ子 年齢 68 歳 職業・学校名 主婦

3月11日夜9時が過ぎていました。各家庭に入っていた防災無線から「細谷地区住民は全員、山田地区公民館に避難してください」と放送がありました。

私も民生委員をしていましたので出かけて行きました。細谷地区は3キロ圏内です。

皆さん着のみ着のままに入ってきました。

大きな荷物を持っている人は見受けられませんでした。一晩だけ泊まったら、次の日は自宅に戻れると思いついでいる様子でした。何人かの人とお茶入れ、炊き出し、言葉かけです。

次の日の朝、防災無線から「双葉町民は全員川俣小学校に避難してください」なにがなんだかかわからず、家を後にしました。

転居八回ですが、今は夫と二人で宮城に避難をしています。

私は語り部として《被災地からの伝言・ふるさとを追われた私の体験した事》を語っています。

宮城に避難した人で作った会で《故郷を追われた・私たちの証言集》を作りました。

たくさんの方に、今後の参考にするため読んでほしいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤 要吉 年齢 69 歳 職業・学校名 除染作業

大震災を体験して私は飯館村にて仕事を
 しています。除染を通じて飯館村をきれい
 に土砂を取ったり除草したりしていま
 す。広大な土地を一つ一つていねいに
 みんなと力を合わせて作業をしています。
 村民のみなさんも自分の土地を見放さずに
 一刻も早く戻って来て欲しいです。
 一人一人が汗を流し土地を耕して田畑をよ
 りかえ様に村民の皆さんも頑固って下さい
 体の病気の心の病を~~病~~気を付けてごく普通の
 生活を営んで下さい。